雜あらひの記

昇家乃記

全一冊

特別
ヲ9
3909

門
3909
巻

昭和二十九年度
四月十九日購入

序

おもて世の中にあらゆるさまざまの物をよべくかぞへ近江の海みなぞこをはかぬべき。出あるいは先が陸奥のまつの紙も深あるまじ。ほしきまゝにとゝのへども其始をたゞすのいわゝしぶんは あまたども。夏引の糸乃一筋をもつて乱れ出て。さ結のたゞしくかくして。さ始のたゝ

いろあるんそまどの中に女るりてあそぶ。
関合。須かず。雛祭び。七夕ふるのあい古へ
今に互りて。かくれも絵を。ぬ。ぬ。ぬ。
ふまど。ぬ。ぬ。明るまどの心をゆる中ぶら
しあ夢。対文に女るりうわびにせる物うう。
ちゆ物をちまりまりく。ぬ年比むろく易
孫。関くとひ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
人ちくう。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
の麻衣狩ふ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

び徒に赤色絵りぬ。交に波云虫方の書遠さ
れ。書て。芙干巻色を足絵る中に。色
くちち絵ちる。女るの数まとせられぬ。
僕ぬ書紙得にようろきびに慣に海人ろ
ちく縄ちりぬ。ふくびゆうしりつこ
り書にかうぐ。漢千色絵ある
ぶにんれが紀とで絵。ある八巻絵りれのよ
まど秘医義薬を拾ひつとしに
耳にふる米あれが海さ千れ

をり。汀の藻くづやうに集免。えくら紙にかいて。
ふまとゞ紙を作るといふ人は。素より窓の竿紙
あつ紙。雪の枝をうつさぬ勅撰。ふれし新人
のわざくらを紙といふ人ども。故て得しらん人の
あるいは紙。唯いとゆゑ女子の。故をとゞ称。
新しき紙ちくべき浪とうれしとそよのを

寛延二年己巳弥生

摂江　田中友子書

雛あそびの記

度會直方著

ふるの神祝ぬる年のむしより今にてうて
三月の若菜毎ゆいとうまつぶもる蒭形びの
源をくんで結ふにる早ふる神代の若より傳
き紙半ふる紙世ぐら人のむかしにのをちり
りてゆき神語ふのふる昔抹の道をて深
をなに示にをとりして結ふ人しるし
ば其物の根をく枯野の雪紙ぶりれを
下若の名海をくんで求ぶんもせてを

いてんぐうに乗女のりてあそびものとかりへこそ
ゆろろふもいさましきれゆうまけ幸[illegible]け幸
を高く高人に探り近く物高ろ人り
見ゆ結れども高に高ろ人も高く怪よ徴
せる書もこんあるこしあるに日乃ほまく八重蓮
高ゆろ彩霞の窓乃りとにある文をえくき
こん結れば歴徳さるのかを彩く降まに時
冠紫米の色ふ紙こん習しまへ紙あに作り物
えめよし紙結れもさるい雅古天皇乃時

時段中を司と為めしい天皇十一年に始毒
冠位十二階を定え日十九年に百済の若朱
の色冠乃ふ紙定めあるればさるの幼さ
時代事とるい完えん朱はしあるの人の役に
さ今の雅い天皇と名付て唐士事[illegible]と
新伝人乃係をとるさ
書よあるとやされ結まども見しそ
ぐしさ毎日幸紀をえ作へ
七年の長二月大物を祥乃吉よ[illegible]

所下に四方にをまつ大夫命も和尚をとけまろ
和尚坂とつて石に成ぬるもの一人
乃小女あるを見て愛堪安倉が妻の吾田媛
と深つて孫反を企ようを告まつを欲
に法麦那素森孫弥をとつ事こんろ法麦
那素森をいまあそびの事たちと紀日本紀
にたるされまばしは阿波をいなとつるの
ありて住徳をるの時ようハ元そ三百年ハおの
事なればたるよう時ふも祀ば又麦国乃

我国へ来朝せし始ハ光を崇神天皇二十四
年の秋七月任那国乃使弱麻呂来しるれば
院にいまあそびとつる事のはしよりの十四年
後乃ようりて唐土東五の像をしりてあ
そびに祀ざる事明らにて金く唐土より始い伝
へるにもあらば神代の時ようりの也万葉集
乃歌に天照とよまし人今の世ハ悪る雖と云
ものにて家拝ともつる也源氏河海抄に人皇
ハ三宗まで乃紙用ものをまこふ

負とるたり這るのやうに作まろとのとろの成さ
紀しまうと光源氏はの圓須磨の浦にて被し
給ふは人形を作り身に宗るを流しあつの須磨
の巻よりこれはの人形も這るの数すべし
蓬屋を麿をさしい色事をまろぐくる後ぐ
さして拉物ともつて也西著雅仁天皇の二十六年
天照大神伊勢百敬度舎の十社川の上に
山張社の乙美る命蓍して偏霊を作らく
倭姫命に社被解をなさし見給ふ事 作被

蓍蓍霊からんさに人形たり人く被ゲをの時
主分にあやまり犯せ罪咎たりうまあに
神の不為をに蓍偏へ被解負て海水へ流し
捨るおのにうる分もとで義心も清く平ぐ
身べきあの後被祓たり去によりあいふ人
より山天照を拉物と名付て常に小四方
ふとんとおそび物とまろ被の人
雑を祓除しむ被神事たりうと日小
蓍系とろ事を唐土にてもれ小湊

流とて川の上にて男女あつまり藁
人形をこれて災難厄難を祓除する儀式の
て文人は盃を流して詩を作り酒宴して終日
を曲水宴とて宴を相催し二十四代仁宗
天皇の元年三月巳日の後園へ御
幸遊ばされて曲水宴をもよおされ
日本紀に見えたり我邦にても唐土にても
むかし三月上巳の日に御幸ありしが唐土
にては巳の日を止くと三月三

日に定めと宋書に記侍りぬ我国にても
上巳の節句といへども今は三月三日にいとなむ
事となりて侍りあれば此日女子の雛祭
て祭事も彼岸に合されば毎年災難を祓
除く系なる事歟しかるに俗勢の祝事より
昔より女子のもてあそび物に小家をいとなむ
ちいさき男女の人形を作り置きて衣服を
美せ家墨の上に居置き玉あり夫婦ひとつはこ
雛しをもちて祭ると云侍りて

源氏物語玉鬘巻に上野さうの紀山けり
源氏の玉乃ひかりに作り清らうの衣装を
玉鬘の男蔓を源氏玉と名付女雛とこづう
と名づけ夫婦はめ座ふむつまごと作と学
びしに源氏玉にそなへ人まつすの粧ひとすして
粧ひ結ひ紙太鼓ぶ屋墨をこづーこしば注
絃之ものよりー笛武鼓がきこー作るも女いこれ
も絃をも一こび嫁してはまに玉とうい夫婦
乃中むつまーく内を治れを女の職ふと

とるなれば、ゆとるれば内よりをを女をとゆ
むる事にすんあるきるえ之いをとらよかあれふさ
天和元年するゆ人ちの子を雛といい雛
雛れすんどうう移るに乃乃世の人伝れり
うう玉簾を好ま茶くしき雛を色する
ゆうう泓乃ゆ〇をうる細仲ちる物を仙う
い雛を大きに作りゆしてを人を雛を
しーよりうこづうう得うしりうしうる人
今の世にして形ぶ雛のさを女を柄乃格の

名のみをもて呼いまとらへ人を名に叶わざるべ
ふ偶偶所のりてあつうふ魁拔人を乃ぢ〻あ
ゆうて年老ゆるに雛をちいさく作るをもの
ふハ廿を名命の出像をかとどりる系縁をも
あるを也比神を大毛美命天が下を国祈く且乃
出雲国文十猪乃小江へ乃ふ付海ふ乃
浪乃上ようちのさに男白厳乃皮を毎〻
鮫鯨乃羽を衣〻て形を来れる神あり大
己美命大江あやく〻ぶ〻ふにのせてて

抜びの人ば跳そびあり出類を繋絵うう大己美
命神文よあやを天にのがりまして此年
を筆て高皇産霊命に問給へば吾神問子千
文百乃神あり其中に吾拔乃乃ようう海陸乃
紅ちのさに神あうふに出現ようう〻く
月を中をいの人と勅命あり此ふ美名命
ハ大己美命とれ仏を合せ醫術を初めて
にを人をろく乃病雖を拔い人ふ屈乃
法を定めて万の庄乃雖不祥を拔い逆法

人を仁徳の人法を尊びて
ものをまもる淵よりも深く今の世までも絶
ぬ二神のとく玉ひし方術ありて淵のごとく
ぞのゆくすえをかぞへ後鳥羽天皇の時より
百海玉より醫の博士海辺より二神のさぐめ
玉ひし一方術をもつて世にあるかぎり
あらしむ中昔でも和氣丹波の丹家
いにしへくすしを術を伝へ良
の丹能にはるかれば雖をちいさく作

る事を本義とするか小茅輪の遺風に
て世表名山神の気たちぬさくまは世界
の縁をはらひ給ふ雖るの身にうけて祓び
のくの災害を掃しい除く形代をもせる神
事の始なりしかあるそれに男女をふあらた拙
又蟹乳の時貝合とはじめてそれをもて
結ぶるの神代の時貝殼貝殼蛤貝殼の一作と
そ書き神祇祓ひまつるなかの人
時清浄貝殼貝殼清浄宜とうたのを作りなで

はぎ佐宜とつけおのれ神えうて[illegible]
えませる衣服を佐宜と名付しをけふは佐宜
の中乃佐を略しさいとつけたりまうれば
嬉礼乃時貝捕とゑとしく這ふ紙はんふら
新年も弦貝服と紙新い作る物
ちう人乃世と成て天照皇おをうて新ぶ
時見へ仁徳天皇乃清時ちうを以お意仁天
皇乃五時天日槍新羅国より七種の寶物を持
来りあ見伊豆志八おお神ちうを略め但馬

国出石に住て老母乃女麻多鳥服を安て伊
豆志乙服を着ちう仁徳天皇の五時を服神
を表ふ辰社乃神意ちうびめへども兼引結ハ
ど其時しへ乃秋ふ下氷社乃神殺ていうく汝
彼服と妻にせんと思うで衣褌ちう天津汐と潤
て字礼豆秋を赤しちうへとの後へば天殺ぢく
潤へをちう矢をび家乃様ふさ[illegible]ちう矢
花乃花と化しうれば服ちうあ[illegible]ちばし
ぐを形紙ふんとて其家に天へちうを[illegible]

婚姻して夫婦となりあるを後世にその神事
の婚礼に用いし字礼豆敷物紙使つゞと
てあり脇立て吸物人ば妻病を清てみゆく
若きみを張許男神叔子字敬志後雛
をなしいうて清しあるいとあり乃ちれば清叔
乃ちぐくちきみふ妻病盃く幸のごとく
牧氣しみと也けるより仁徳天皇乃清明
字礼豆敷ものして雛を作り女子乃りて拵
び祭とちしくるとある書にもるされ作る又

えいな道々ちして有くく乃間度をかぐら作る
に付て清少納云ぶ拵紙にるとみしうに立
を拵ハ拵しる美えいなあるそびの間度と出し
も三月三日とうへば那乃中のそハ鄙のにて
うえたるうを乃ふ中でも雛拵びをいとちて
解ふぐうへ数一日も社ゆくくきのよ
いくしも祭くしうに間度もうへハあふう
氣ごとく始りんをを立しきりのにいい
しハ夫婦むつまじを宮体を作にはつしりを

あるゝ女の教まちまちは貴きも賤きも人
乃許へ嫁して夫乃行にそむくまじ能ふ人行
べきを出さるぬ方に引れ我心乃まゝに振まし
女乃獄ゝぶを忘れ行ゝば是に夫ふをさめ
捨ゝれてお祝を悔もどきかひなくるはし方
恐しく思ふるものかぶりふだるる離の調
度をくゝ思ひ忘るゞ忘れ余情をふくみて又
れたるべし極又離の調度の教くたる事中
に太弦ゝとゝ物あり色も秋代ゝるゝ為りて

無塵を近寄笑夫を拒ゝ拒也を始ち
に夫邪非命に身老を出ゝ乃清徳り
及ざる事を忘て我孫のその隼人と為て
仕へ人さんと拒ひゝ仕隼人を拒人ゝ
常に天空乃爰樵のかゝを離れを吹拒
まゝしてにふまるこの也ゝ紙ゝ於正通の説
に大嘗会の日あるゝ乃居下樂音に入仕隼人
ゝ紙拒を祝ひ森あり古れを拒吹とゝ神
代乃巻風也とゝ仕拒吹ゝ乃ゝ神を吹

罌粟迫くれば
に拒麻太を植
太祖ゑも狗人と
をしひ雑間度の中ホても第一乃物とする
い恵麻を拂ひ美害ホ乃ぞくる神代の
伝人をのれば乃ち又今の世までも小児ホ乃人
おぞるゆある時狗のゑくと唱伝ゑも恵麻
を拂ひ乃ぞ厭勝乃法にて為乃ちぬ
神祇乃ち又祖宮年記天王乃使人太神人

とゑもあにゑ草人乃後裔ホ乃ちゑ雑
拂ひ神代乃伝乃事ゑれば乃ちそに
ゑべきゑにあらば絶るを乃ぞ女ゑのたゑ
事と思ひぐ神明乃宮ゑもいで伝ん法
を作てゑるべき事乃ちゑべし

附 七夕ゑ乃記

七夕の義と影○伝るに須毒偈紀とゑ書に相
坂武丁とゑ乃伝術ゑ乃ちゑある時を事ホ
ゑ七月七日に織女まさに天河を渡ゑ人事内

てらす織女織りあるの乃わ
ゑ織女たづく年に一度世乃人今ふ
つゝらまで織女年に縁をるとゝよみをり
け年まづ伝用たづと袖に涙をたゞり風と
徳ひるがゝるたゞにたゞん物しるゑめるひこ
のゝろ紙図よまで伝ろう色巧莫と名付て大
内乃は行年ゝは茶々る唐土にても色巧模
ゝて文色の糸をりて長と結び作り酒とそ夏
菓ををり文人ハ詩紙作りて二年にゑむゑ女

どらハ紡績乃ゑわざと形作るゝそ日の年ゑて
ハ唐徳天宝廿天平勝宝七年より始るより一家
孫園の云年机えゝゝ書にゝゝ七夕ゑふ乃
紙式ハ江次第ゝゝゝゝに記ゝゝ紙宴に於ゝ
行る七月七日ゑれば義人伴個度を排ゝ拭ゝ色
ハ唐土ゝて廿月ハ長肢をゝゝ書紙脇に事の作る
を作風ゑゝ梶清涼殿の庭に来涼乃ゝ紙
机と四御立て玉漆乃燒香ゑ年に灯火ゝゝ
机の上に色くゝ物紙ゝゝ人伴所より

一張ハ七絃ヤ下し東ハ西ハ小乃机の上ハ妻に琴柱と
立てたまふ紙玉延暦十又辛乃例を用ゐとすり机
乃上大臣に和も寸ぐる湿香をくゆゝせ盥に乃
を入る大臣乃星祭うに琴柱禁うに乃招あり
常に半に年徒秋の調にとるとたう庭土にても
此日よりれが妻織男女泡宴して琴を奏で拍
ぶ乃又人待る此紙歌賦よ乃る
さぐ乃ゑく星合の意乃たるとて
秋のたぐに琴柱とうたう

又あまの河とゝ人庭土にてハ天河銀河天漢
うんどゝうう我国すてあまの河とも天八十河と
も天安河ともゝ人ハ神代の時八百万神天安
河の会ふ会合ゆゝしう待る天安河ハ天漢
乃名也と美良ハ河まうされば天河を安河と
宗法ハうゝ乃系
今青ぞし星の意せの安河や
月のみゝ乃もゝ乃ゝ
鳥鵲乃橋とゝ人書鵲舟とゝ人書

はく橋をすて織女を後にとりて六日は和
を天のさよ橋とて年に風葉抄に人麿歌
に行旦家集より

重時のあそんの
けうとうしは七夕にめへ

七夕とりつかへ年織女の二星紙とへて時すにて
男七夕を彦星とつかへ織姫とつかへ今の
世に家とる所なるに年とつかへ名に因て年を
業とる風情を絵ゑ紙に絵ゑ人

敷問きゆて年に年姫ざるなり右遠くみ絵を
庭土の夕を我国ふ伝へる由れたたるべとと
つかへ名に年に年久しきものと其故に神代考に
味粗る彦招神の妹下照姫の歌にあるもるや
とたるべとのうるべ世とつかへ年に人伝をば
きるべとの名に孩に神代より有りし

巻之上 終

雅亮二

奥合乃記

かゝるまくもかしこき吾大君乃ゑらびめしたまひし
あまつ秋津洲乃國い百千乃他國より
とぐれ作げばいよ〳〵ゑらばいよ〳〵ゑらび
あまつ〇の國土豊しらぎろかとろちろる業ま
でも神の業乃清殿を祈りて万乃業
をいでそにろ志えわれども上手ふり世く
の星霜紙かゝ〇神と人との中結ろ[illegible]
ども今將よりへ乃世にいりて人乃心花り

うり迎にそそ千早振神代より傳り遠き世
神事八月末ぐれて人もれぬ深末
と〆し物事雲客の畢り乃きき中に
女子乃書くりてあるべきさ法乃うい乃貝合
も至京姫ハ神代より傳り乃清殿乃とぬき
ゆる紙今ハあざ左る姫のたられ拾びと〆ゆ
くうる紙の出られが出ゆる方ハ落れに出とび
きにもあらばゆくくして幸えおられつくく
貝合の姫を考伝ればこ幸紀と人数書に

素盞嗚尊乃御子大己貴命とや清神ハ稲
八上姫命紙えをり妻にせまくおがゆ人
ハ清乃幸八十神ことを服立て伯耆国
ム幸にて待せんとうりあざひに数さんとし
ゆ人ば大己貴命とくして身を逃れる矢示に亀
のがり神宝産考るに至ありさ面を岩ゆ人ば
討貝姫蛤貝姫とゆ人ゆ二人の神を矢ぐ
討貝姫ハ波佐写紙作り蛤貝姫ハ小清井の水
を乳にて母乃乳にぬりしばうくき矢神

生まれしぬを以て神素盞嗚尊の沛汗に行
てれむとの沢勢姫と夫婦に成給ひ世に
むとなの神と寿を妹ふり給とゝ事の
姫るも蛤貝姫の名によりて母と海の貝を拾
ひ貝合とゝ夫婦和合の沛敷ひるより
起もゝ事ゝとゝ紀之文と紀天皇の十三年
の春十月にあづまへ行幸まし海上縦国
より安房の水門へ海をゝ時大臣より芋賀尊
の姫ゝ妻を申あしをゝ乗をゝんて

海をに出て白蛤を拾ひ神紙繁麻立尊
とゝ人を蒲の蒲を敷て縦ゝ彼白蛤
を熟みて進ゝ白蛤とゝ今此蛤の
事なりゝとより日の年にて蛤貝と同出ゝ
祝儀の物ゝ姫れ乃取に蛤の美を用
新事ゝ仕ゝ京拾殿乃山奇ゝ
志ゝ為ゝ蛤とゝ
ひゝ紙ゝ紙をいゝゝ
されば京行天皇の元賀尊をゝ蛤紙拾ひ

あんりゝ殆と清后の稲日大郎姫八坂入彦
の心操正しく性和に淳まと淳徳ふかな
つるものにて美貌なるか唐土ふてハ雎鳩と名付
周文王と申聖人の淳后失知とよハるべきた
賢女にて淑せ女人ハ貞を婦徳を持に作りく
冥くゝる雎鳩ハ河の渚よありと優りるを
を関雎篇として詩経とよ書に孔子ハ是
ゝで先ものつ此を鳩ハ河の渚に居しも活
に嬉しゝる事をせず所以天

移と夫婦別あり人数にかゝるい人日ハ
一度ばかりでハ意さるとも古奇り
みさごの渚にゐる身のゝしハ紙
まんゝんとりも我こそ侍され
と歌にもよゝりゝ蛤ハ中に真珠をいでくゝと
詩にも作り玉紙ハ黒屋珠といて女を四を
治め婦徳家を思せるふゝ所へて優しゝの
ちり極又貝合の世にさうんふちり事ハあ
官家の書に志る人ふハ村上天皇り清時

源の高明と申人おはしけるは醍醐帝の御子
にて才学もいみじうきこえける人は康保三年
の正月に右大臣に任じ同四年の十月また左大
臣に轉じ給ひ西宮大臣とぞ申ける世の人これ
をおほ人もゆゝしく時めきたまひしが冷泉院の御
代しろしめすを安和二年の三月ある人の讒言
に罹せられ大宰權帥とおとして筑紫に流され
ましし時越前守為時がむすめ紫式部父任人
して藤式部といひしがおさなきより大臣に

なれしたしくまゐりければ大方ならず別を歎きぬ
大臣不便の事におもひしめし紫式部をして石山
の月をうらん事などより世はかなきをみれ
ども今更せんなくもえけるに家身も私に思ひ
をかなしみ夜もすがらなければ紫式部の善悪をてらす天道
しろしめす神明も明らかにみそなはし給へ
われさへ志しいかにも世の浮雲にさへられ時の
さうしらにあまりぬる月おぼしてあはれさきまん
すうこげんとまうらるもかくして紙海語

乃時を待べし無じゆうあるべきもの
常に秘蔵あり伊勢国二見浦より拾ひ海
蛤耳白とて大蛤一名を丸出陰陽の形を
我方ふうで先陽関の形を式にまつりて其
法しも大聚院（遍照院親玉村上女王院）より上東門院（一条院后彰子）御清
慈ゆえ長月の比くぐさめぐさめつつ
ちう紙や結ひ立て結ひ立て女院式
紙白き物をとうまつりてとぐさとして行れ合せ
たれば式紙ぶやうのはかばかしきものにて行

できうんが行方ちらで出屋住吉まで見別
まればめたしをおしわしく作り出て
ふうせの人うしろれがさべ思ひましく
さも作りと作れば源氏物語五十四帖
作りてちうろ身三の差紫巻を抜にそれ
て新うに出るゆ人為式紙の名をあつためて
紫式紙とめさしれあるさにても小別れ
西文大臣乃事をとうまつれば彼ひ源姓に
てまし陸せば光源氏と候名してあつとゆう

うに世のさゑをゝに業とる事に作り結ぶを西
京大原の辺に年砥石にありて後田融院乃天孫之
年四月にゆるされて都にゆりのぢり式部にあり人
垂ゐ〜片乃牡貝を我方ふ爲先[illegible]片の
牝貝にあはせい合せておいい垂〜汐乃末の
遠ハざるゆを借り出くゝろとびのよをを法爲
糸の女房を宣伝へられ典あるゆにおもし源氏
物語まくゝ乃姿を蛤の中に結ぶ貝合乃た
ゝしをを世より始つ結ぶとゝやはたられ世

小蓋に付て三十六種の欲仏貝小奩仏莊
乃色紙貝をど皮家より造出され結ぶ貝の
数八二百八十種ゆて三中欲によるゝものハ二百八
種に乃ぶ乃ぢり但〜こゝしい色〜の貝とあつめ
そもくゝの名を付るゆゝれば蛤貝一種にて
陰陽和合の貝合ゝるゝは夫に美ゆゝて拾
びゆれども貝合乃名ハ同じを故を別をゝ
〜うんゝてゝゝびれ乃はゝ付より貝合ゝゝ紙改先
結りて貝を一ゝとゝゆ人結ぶちり生徒欲にハ美本

集り面白よ哉

今ぞしる二見の浦乃玉ぐしを

貝合して世よたりろ

万葉集に筑紫乃海のいとせ貝ひらふとて

も貝殼乃多とふやはくたの海の事陰乃

麻海苔明神紙はくたの神とも

やまと文庫の海乃貝ひらふとて貝合の

ゆて貝殼乃事にあるべし歌よ哉

二見乃浦ハ伊勢國度会郡にて結ればつゞく

あしど山浦の蛤貝を貝殼乃名に用ゆるハ

ふる由縁も侍る伊勢とゆいとせとゆ中器ハ

て円文ハ陰形にて中ハ文ハ陽形ハ

ほゝませばおのゝ國の名も夫乃ゝ

も男女いとせ乃表徴にかたゆ結ゆ

山國の二見浦の蛤を貝殼の名にせ物乃

べゝ蛤乃形を人結れば陽貝ハ形ハ

一ツ乃牙ハ三ツの嚢あり陰貝乃形ハ一ツ

にて三ツ乃嚢あって相ゆる男女の交に遠乃

夫婦和合の道をあらはす物少人婚姻の時は男女
相互に身一の間度とする也されば屋人の道を
学ぶを夫婦にあるべしみな結れが男女いりまじりて
しかれど世に大切なるものはなし言葉たらぬと
なり父と子となり兄弟となり朋友となる
男女の偏も夫婦の中より出来るなればゆゑ
に世にとべきを不相応なれども男女いりまじりて
なる中にて美くわい和らぎ方に流れやすく婬
らん方ふらきやすくはまりのみはてしきも

此道なる紙なんてもまづ夫婦ゆゑまづきさらに人別
あらと戒光あるべしこれ女子は雑談のはあれば結
て世と隔の奥ゆかしく堂ゑは閉て云柴をと
くるべし何をかいふとくほしやんいい
結るとや院に人の御へ嫁してなまの心にまさ
らし閨姑に孝行ふ仕人事婦人の徳分也
主分一世の名利の男にまつ人をさるなた人
ほ月の男奥をこそ一所の女奥なるに不乃
男奥千万をあらん光合をんとすれども遠も

合ざるごとく夫婦にまじはる人どもといふ接ふ
脇合作る物を云ふ上一対のものをあとび者と云人
ども紙牡貝を把ざれば牝貝に交ひしたる造化
り法のふしぎ紙人毛神乃別所の教に
かうし作るものを毋はじてぐるに色好けりて
あそび者ふ把ざるなり法にあに求るべし
斗西しき道の教者なる少後小松院遊永年
中廉義院義満公伊勢今川小笠原乃三家
に仕せてもろくろ乃礼式を定先させ中ふ

貝合下

奥義のりてあそびに陰陽交泰乃表半夫婦
和合乃教をれば色ぐもこそ法云の大事也て
其法式を定先あり今世までも彩婦の
楽しる無乃流法にいかるべ貝桶を勝る人く
約るのとふたり作る玉貝に陽ありて男女乃出貝
に陰ありて女女乃貝桶のうさ二尺八寸天の二十
八宿に象る肉の廣さ一尺二寸六十二月に象る
に上に敷めて家の定紋を絵ゞ絵に書ふ
足四本に玉貝の四季に象る玉貝桶結

よに勝り方を上へ元々陽の義也生関桶勝
の方を下へ元来陰の義なりそこをもつて故
実に是を見れとも人々も礼家の法を学
ばへしまた国にもて実小事にて免ぜらめ

頼朝

今の世に女なりて於ては奇ぐしき所作易
孫ながら清和天皇の法皇中将土原業平
沛使として伊勢国へ下向の時帖子内親王為

実に綸旨なれとも紙人なれとも
の心ざしも深くばしかせ給ふ
にあり孫が明日は尾張国へ紙ちんをけ
ふはぶれ為実の心ざしを
中を作りいとおぼしいたるくり
を為りた事におかりて今別綸旨
時是ほん事もとりたれどせめて
るわざをゆへ人ときさしむらいて
かりまいあるが為実をすす名誉とれし法

せ結ぶい奇乃上の名を盗に出て出ぬ
から人の口をくれば業平あれハ
とありくれば業平あれハ
くる藤の炭にて下の名を出ぬ
又あり坂乃せたい紙ちん
仏ゆ伊勢物語に人作る古きこと古奇乃
上下の名をかくとにうつし別れ事をして
あそぶゆにりめ後松乃炭ぬて下の名を
出つだゆ縁にとり奇ぐくれゆを後松紙

れとくらつみちうみ元に仏よりくる事の作ハ拾遺
集に内よさむ〳〵ふ人をちぎりて作りる和かて
くまふできるわどにしこうとはうてる紙ゆ
て女のいしたうてる
人心しこうく今ハたのもしよ
兵衛宗夫人
義ふるゆしるねぞにる
ゆきゆ業平の事ぐよんよりくるゆ人
関にたるて作るこのるふ事作れ大内

いて友女のりてあそびふせしとも又結縁し
つるの作る歌三十首ばかりをすゑ分けて名不
を結びて奇びとりごくうへ玉く其歌新
に引合せてえらん名不知そ人を奇けりと合せ
をもろべさきあにしくるりのちり乱れ天鷹寺
乃女御立雅殿の芳るとやはふ一条左大臣師尹
この御女にて後せ参ぐ内へまりあらべ非
忘れてかたし後を時に又師尹乃とへゆの人
させの人に行に一ふくるしの人次にいさんの

はれ今を年人に添まさんとおがせ和古今の
後世まを皆うくべせまうんとれそうへにいせさ
せの人とうん殿のしてふさ礼に古今集の奇
乃名不知を結びた別の礼にを名仏の奇を去
引合せて結貞を引やうにちら人古今稚る古
乃役としあとある友家の書ふまるまの人り
うし結貞の始まるべさうへ奇びとれ年名と奇
貞としへ奇びとと名付し年八百年六のと
乃ゆまり其ゆ人に今乃かるとしてゆの

に絶て帰りに後陽成院寛永二十五年五月に紅毛
人始て琉球に来る彼紅毛人今のかぴたを持
来り日本へ伝へ乃ち是に持来の異しとあり乃
ちそれとて是れ此物にて持りてより奇異後れ
とて是れを名をぶにまるる人もまれにたりいつ
のはりろ奇めづるさとうあやまりいまれ持来
此物と混じるる也行事もふるたむうぞ悪づく
と清お納云ぶいしも実さるるみぞうむあん
女子は奇異とも後れとも後れ変さと

後ちとふさんの名のさかいをわたまへ
天竺生神の沖祝宣にも其物乃祝をらぐ
ふとして後れ今の海ぐりをあへ此
人とは屋人の数多あるしばをる形女る
まりともまつざるそ乃ちまつざるそ物ちぐる人ふ
見ひとしひして物半乃事乃事を正さん
半ち妻たるべし

まそ下 終

寛延二年己巳二月吉日

江戸通本町三丁目
書林　西村源六

京都寺町五条橋詰
書林　額田正三郎

大坂心齋橋南詰
書林　松村九兵衛梓